

史料1 上荷船・茶船の来歴 ○「船極印方」市史編纂所所蔵写本

茶船数、同組頭名書、并上荷茶船来歴

（前略）

右上荷船・茶船之儀者、従往古有之候へとも名も無之船ニ而候処、文禄年中より上荷船・茶船と名付乗働申候。然処、百年以前松平下総守殿御仕置之時分迄者、今橋迄丁目塩屋惣五郎と申者支配仕、運上銀差上働申候。運上之員数者年久敷故難知候。上荷船・茶船之儀者、橋々落候時分所々之川渡し、其外船之御用働候間、末々迄御役船ニ被仰付、運上銀御赦免被下候様ニ願上候処被聞召届、運上銀御赦免御役船ニ被仰付候。元和五己未年九月廿六日、島田清左衛門殿・久貝忠左衛門殿御奉行之節、初て御極印被下候。摂州・河州川除竹木積申時者、上荷船老艘ニ加子式人乗御扶持方米式升、茶船老艘ニ加子老人乗米老升宛、於口今ニ被下之候。其外之御役船相勤候節者御扶持方米不被下、被仰付次第相勤申候。船之御用手支為無之、舟惣代老人宛御番所江相詰申候。川内船之運賃者寛永四年ニ御定、其外船之御法度制札難波橋・南伝法村・長堀高橋町三ヶ所、其後安治川出来候時分、安治川北迄丁目二ヶヶ所、以上四ヶ所ニ御建置候通、末々之者相守候。元禄三庚午年より新規ニ御運上銀被仰付、上荷船老艘ニ付老ヶ年ニ銀子十六匁宛、茶船老艘ニ付老ヶ年ニ銀子四匁宛差上、其外之御役儀等ハ前々之通相勤申候。働之儀者大坂川内之諸荷物積働申候。海表者兵庫・谷川・岸和田・堺江罷越、諸廻船ニ出向、川口より諸荷物積、大坂浜々江積届申候。大和川表も水有之節者上下之働仕候。

史料2 【嘉永七年 異国船大坂碇泊の際、上荷船・茶船の御用】

○「諸事控」（大阪市史編纂所蔵）、大阪市史史料第五四輯『諸事控（上）浜親仁海部屋喜兵衛寛書』一三三頁（に翻刻）。

嘉永七年申寅九月十八日ハツ時

但シフロシヤ国

一異国船渡来安次川口一之洲老番が廿一程沖ニ碇泊り致、

ハッテイラト申橋船ニ而安次川四丁目迄乗込候処御役人衆追々馳付、上荷船ヲ以買切、其所ニ而願書差出シ、ハッテイラハ元船江引取候、夫が目印山江追々諸御役人衆并蔵屋敷を懸附陣取被致候事、両御町奉行様ニハ四丁目辰巳屋之会所ニ而御本陣ヲ被遊候、手代衆ヲ以急御用ニ付五ツ場所へ役船被仰付候、大懇察仕候、御手当として目印山ニハ櫓五挺建、上荷船拾艘、三挺建上荷船四拾艘、伝法口ニハ関留上荷船貳拾貳艘、都合七拾貳艘安次川組が差出申候、木津川口八番ニ而関留上荷船四拾艘、尻無川口関留上荷船三十五艘、都合七拾五艘木津川組が差出申候、此外両川口共五挺立・三挺立上荷船数多使船差出候、尤加子五丁立拾老人乗、三丁立七人乗ニ有之候、猶又天満信保町浜ニ而手当船として上之口組を茶船拾五艘、堀々組を拾五艘、川筋組が上荷船五艘相廻シ置、日々両御役所様并御城代様御役人衆中御乗船被遊、并御荷物積送り候船数凡式百艘余遣候、安次川御本陣前ニ手当船として川筋組が上荷船拾艘、堀々組を茶船七艘宛々差出申候事、此外川口三ヶ所御番所江手当船として川筋組が拾三艘、安次川組が式十一艘、木津川組が十七艘、堀々組が六艘、都合五拾七艘、日数廿日之間相詰、但シ加子三人宛々、廿八日

異国船江水被遣候ニ附、水汲船拾艘ヲ上荷船五艘にて洩（曳）行候、川筋組

が式艘、木津川組が式艘、堀々組が一艘、都合五艘ニ而目印山迄洩（曳）行、此所ニ而水汲船老艘ヲ上荷船式艘ニ而異船まで洩行候、尤又上荷船十五艘ハ安次川組が差出候、

十月三日朝異船退散致候、被下物有之、下モ之関船ニ而加田之瀬戸迄積送り候、

同八日御陣払ニ相成候事、（後略）

傍線部注 ハッテイラ ポルトガル語 baia による。西洋式のボート

（舳）のこと。押し寿司の「バツテラ」もこれが由来。

史料3 【嘉永七年 大地震・大津波での上荷船・茶船】

○「諸事控」（大阪市史編纂所蔵）、大阪市史史料第五四輯『諸事控（上）浜親仁海部屋喜兵衛寛書』一三五頁（に翻刻）。

嘉永七寅年 諸国大地震大津浪一件

十一月四日、朝五ツ半時地震ニ而人家くつれ候、

同 五日、七ツ時地震ニ而所々人家くつれ候、

同日、暮六ツ半時大津浪、木津川者高サ老丈計之高浪五、六度来り候、堀江

川ニ而五尺計りも高浪有之候、此為ニ難波駕・勘助嶋ニ有之候大船皆流込、

道頓堀ハ大黒橋まで大船流込、橋々落、両側懸造り蔵納屋共微塵ニ相成候、

堀江川ハ黒金橋迄右同断、亀はしニ而上荷船皆泊り候、江之子島亀井はしを

下博労御旅前迄大船ニ而つまり候事、大黒橋が住吉はし下之辻まで大船ニ而

つまり、此為ニ上荷船・茶船・剣先船其外小船類皆下敷ニ相成、微塵と成安

次川橋ニ而つまり候、木津川が流込候千石以上之船安次川へ流出候、又ハ水

之引口ニ兵庫・灘目・左海・いづみ・紀州・淡路辺まで流行候船も有之候事、

流込候大船凡十余艘も有之候、内大半解船ニ相成候、落橋安次川橋・亀井橋・長堀高橋・堀江川、

水分はし・黒金はし・道頓堀日吉橋・唐金はし・幸はし

住吉はし・金屋はし べ拾ケ

破船 死人

上荷船 安次川ニ而四十五人

合七百八拾貳艘 木津川ニ而三百四十六人

茶船

剣先船 貳拾艘 べ

 其外小船ハ数不知申候、 三百九十一人

 外ニ旅人数不知候、

下博勞御旅浜を下もハ大船・小船ニ至迄壹艘も無御座候、

六日、両御町奉行所様御見分有之候ニ付、

七日、朝早々船手代衆佐武寛藏殿・田中義三郎殿・浅田慶次郎殿御出被成役船被仰付候処、船ハ有之候得共場所へ乗廻シ難候故、御三人御同道キ兵衛トニ而下博勞江行候得共

渡ル船壹艘無之候者、流レ上り候平田船ヲおろし右手代衆三人、小使幸次郎・常蔵ト喜兵衛トべ六人、右平田船ニ而寺島へ渡り、天満屋敷伝三郎方ニ而漸々上荷船貳艘、三軒家浜ニ而上荷船三艘、べ五艘出来、役船差出候、下口方あらけ初候、上ハ大黒橋方あらけ初メ、

八日、堀江川黒金はしがあらけ初メ候、毎日三艘宛役船差出候、

十日開、木津川筋八十式日開、

道頓堀筋十二月廿日迄ニ大船悉浮候事、

西御奉行所様并惣年寄様日々御出勤御検分被遊候事、

五日、呉六ツ時此時之物音難何ニ警恐敷次第也、古今稀成大騒動ニ而浜々難渋仕候、

右ニ付町々方施行銭有之候ニ付、惣年寄様方破船致候難渋人江御割下ケ被成下、壹艘ニ付銀七拾目宛々被下候、

十二月廿七日、西寄所ニ而銀五拾四貫七百四拾目

此船数七百八拾貳艘分 手形壹枚ニ而受取五ツ場所へ割付致候、尤木津川之内拾貳浜ハ難渋人多く有之候ニ付不事船へも被下候事、

此割方 木津川組

 一銀四拾四貫百匁 六百三拾艘分

 安次川組

 一同五貫八百八拾目 八拾四艘分

 川筋組

 一同貳百拾匁 三艘分

 上之口組

 堀々組

 一同三貫九百九拾目 五拾七艘分

 べ銀五拾四貫七百四拾目 夫々割付致候、

史料 4 【徳川家茂薨去ニ付遺骸搬送の件】

寅八月廿日方

公方様御薨ニ付御停止之事

口達

一 近々御軍艦ニ而

御尊骸

還御ニ付、数艘之舁御仕用ニ相成候間、兼而相心得達

次第無違滞差出シ可被申候、已上、

但し通路人惣代不殘船場へ可罷出候、

西御役所詰 林 国助

八月廿二日 池田左一郎

五ツ場所浜々惣代中

九月二日夜子之刻御立

御尊骸

安二川上壹丁目肥前屋浜迄御陸夫方目印山沖御軍艦長増丸迄伊予小早ニ而此加子川すし組方

御供方上荷船三拾艘 安二川組方

御警衛方安二川はし落候ニ付、上壹丁目方富島涉し船十五艘両浜方出ス、

国津はし普請ニ付、南壹丁目江涉し船十五艘両浜方出、安二川北三丁目下と唱共方南新田江涉し十五艘、五艘ハ上之口方、十艘堀々方、

南新田下モ方目印山へ涉し十五艘、安二川組方目印山方沖御軍艦迄貳十艘ハ木津川組方外ニ軍艦行荷物数艘、是ハ両川口方相勤候、